国語基本用例辞典

林　史典　金子　博　高岡昭夫
教育技術研究所
編

国語基本用例辞典

金子 博　都留大学文学部助教授
鷹岡昭夫　国立国語研究所主任研究官
教育技術研究所
編

林　史典（はやし・ちかふみ）
一九四一年生まれ。現在、筑波大学文芸・言語学系助教授。
金子　博（かねこ・ひろし）
一九四三年生まれ。現在、都留文科大学文学部助教授。
鶴岡昭夫（つるおか・あきお）
一九四三年生まれ。現在、国立国語研究所主任研究官。
平清水孝昭（ひらしみず・たかあき）
一九四四年生まれ。現在、教育技術研究所主任研究員。

国語基本用例辞典
一九八六年二月二〇日　第一刷
編　者　林　史典
　　金子　博
　　鶴岡昭夫
　　教育技術研究所
発行者　高森圭介
発行所　株式会社　教育社
販　売　教育社出版サービス株式会社
〒102東京都千代田区富士見二―二―一〇　丸十ビル
電話〇三（二六四）五四七七（代）
製　版　日本電算精版株式会社
印　刷　株式会社　日本制作センター
製　本　株式会社　大一製本
落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

S8704／41（日6－2／186）
日语基本例句词典
BG001130

ISBN4-315-50196-4 ©教育社 1986

この辞典を使う人のために

わたしたちは先に、『小学ことばのつかいかた辞典』という、ちょっと変わった辞典を刊行しました。この『国語基本用例辞典』は、いわばその姉妹編です。以下の説明を読み、この新しい形式の辞典の特長や基本的な考え方をよく理解したうえで有効に活用されるよう、願ってやみません。

この辞典のねらい

はじめて『国語基本用例辞典』を御覧になる方は、多くの点で普通の国語辞典と異なることにびっくりなさるでしょう。普通の国語辞典だったら、例えば、

て【手】名詞①人のからだの両肩から指先までの部分。「―をふる」②手首から先。「―をにぎる」③手のひら。「―をたたく」……

のように、意味が説明されているのに、この辞典にはそれがありません。そのかわりに、ところどころに［説明］があるだけです。また、普通の国語辞典は、品詞とかアクセント、類義語や対義語などをのせているのに、この辞典にはそれもありません。この辞典では［説明］を除くと、見出しとして立てたことばについて、ただそれを使った重要な言い回しと文例がならんでいるだけです。このような辞典が一体どんな役に立つのだろう。そう感じた人も少なくないにちがいありません。

たしかに、この辞典から直接ことばの意味を知ることはできません。それを知りたいときには、普通の辞典をひいていただかなくてはなりません。しかし、そのようにして覚えたことばが、ふだんわたしたちが使っていることばの中に、どれだけあるでしょうか。もちろん、辞典などによって覚えたことばも少なくないにちがいありませんが、生まれてからこれまでに覚えてきたことばの多くは、御両親や家族の方々が使うことば、友達や先生が使うことば、本や新聞に出てくることば、テレビやラジオで使うことばなどを通して、自然に覚えてきたものなのです。このことは、ことばを身につけるには、そのことばの実際の使い方を知ることが大切だ、ということを意味しています。また、実際の使い方を見て、自分でそのことばの意味を考えてみることが必要だ、ということを示しています。真にそのことばを理解するためには、辞典の語釈（意味の解説）にたよるだけでなく、実際の用例を通じてそのことばの用法を知らなければなりません。『国語基本用例辞典』のような辞典を編んだ第一の目的もここにあります。つまり、この辞典は、ことばの使い方を調べてそれを知るとともに、そのことばの意味を自分

で考えるための辞典なのです。この辞典をもとにして、あなた自身がひとつひとつのことばについて考え、その意味を説明するつもりで、ということは、あなた自身が辞典を執筆し、編集するつもりで利用すれば、あなたの、ことばについての知識や感覚は、いっそう豊かになるでしょう。

辞典は、ことばの意味を知るためにだけ使うものとはかぎりません。そのことばにあてる漢字を調べる場合を含めて、ことばの使い方を確かめるために利用することも少なくないはずです。おおよその意味はわかっているのに、使い方がはっきりしないという時、ある言い方についてそのような言い方が誤っていないかどうかを確かめたいという時、この辞典から、普通の国語辞典以上に多くのことを知ることができるでしょう。普通の国語辞典は、意味が示されているわりに、そのことばの使い方については、あまり親切でないようです。本当は、ことばの使い方についても、くわしい文例をあげておくことが望ましいのですが、そんなことをしていたのでは分量が増えすぎて、かえって使いにくくなってしまいます。そこで、実際の使い方のほうは、ほどほどにして、語釈（意味の解説）などとのバランスをとっているのです。ですから、普通の国語辞典からは、そのことばの本当の使い方がわからないことが少なくありません。例えば、「手に取るように」とか「手を切る」とかいう例があげられていても、実際には、どういう場合に、どう使ったらいいのか、困ることがあります。ところが、

。〈**手に取るように**〉土俵のすぐ下で観戦していたので、関取の表情が手に取るようにわかった。

。〈**手を切る**〉あんなに友達がいのないやつとは、もう完全に手を切ったよ。

のような例を見れば、普通の辞典にあげられている例とはくらべものにならないくらい、使い方がはっきりするでしょう。これだけで完全であるとは言えませんが、少なくとも、「手に取るように」とか「手を切る」という、簡単な例で見るよりも、多くのことがわかるはずです。たいていの場合、辞典にあげられている例が、その使い方を知るのには、短くて、簡略にすぎるのです。そのことを反省して、この辞典では、くわしくて、長めの用例を示すことにしました。そして、意味のほうは、この辞典を使う人に、自分で考えてもらうことにしたのです。普通の国語辞典とは、逆の考え方によって作られた辞典であると思ってくださればよいでしょう。

適切な用例を通じて正しいことばの使い方が自然に身につくように、というこの辞典のねらいを理解して、あなたの学習に積極的に役立ててください。

採録したことば

この辞典を使いはじめると、もうひとつの当惑（とうわく）を感じることになるはずです。あることばについて調べようとしても、この辞典にそのことばが見つからないという場合がそれです。それもそのはず、普通の国語辞典は何万ものことばをのせているの

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

に、この辞典は、たった四千四百くらいのことばしか取り上げていないからです。その理由を述べておきましょう。

ことばの中には、実際の例を示さなくてもよいと思うものがありますし、例を示したいと思うことばも、それらを全部取り上げていたのでは、分量がかさんでしまいます。せっかく作った辞典も、分量がかさみすぎて扱いにくくなってしまっては困ります。そこで、みなさんがふだん使っておられる教科書をくわしく調べ、実際の例を通して覚えておいたほうがよいと思うことば、約四千四百語を選んで、この辞典を作りました。このようなわけですから、調べようとしたことばがこの辞典にのっていなかったという場合については、ゆるしていただかなくてはなりません。

見出しの漢字

常用漢字（中学生までに学習した書き方）を、見出しの下の【　】の中に示しました。（　）に入れて示したのは、日ごろ見かけることの多い書き方です。漢字も、そのことばを調べたついでに覚えておくと、知らず知らずのうちに、力がつくものです。

文　例

この辞典には、「この辞典のねらい」のところで説明したような考え方にそった、必要と思われる、できるだけくわしい文例があげられています。それがこの辞典の特徴であり、命でもあります。しかし、これで完全だというわけでもありません。実際に使用なさるあなたがたにとってあまり重要でないと思われる例は省きましたし、ページ数の都合で省略せざるを得なかったものもあります。ただし、そのことばの用法を理解するのに不可欠だと思われる例はもれなくかかげたつもりです。

この辞典の文例の大部分は、大型のコンピューターに蓄積された膨大な日本語文の中から、学校で用いられているすべての国語の教科書の、あらゆる文例を選び出し、さらに選択を加えたうえで、この辞典のために修整したものです。したがって、教科書の実例を参考にしたものがほとんどですが、もちろん、この辞典に示した用例だけが正しくて、ほかは誤りだということではありません。正しい正しくないという規範よりも、現実の用法を重視した用例であることをおことわりしておきます。

なお、見出しのことばを含んだ一定の結合、覚えておきたい表現、ことわざや格言などの重要な言い回しは、文例から抜き出して〈　〉の中に示しておきました。

説　明

採録したことばの中でも、特に大切だと思われることば、意味・用法に注意する必要があると思われることばには、説明をつけました。ここでは、そのことばの意味や使い方を、でき

るだけわかりやすく説明したつもりです。その部分を見てくださればわかるように、普通の辞典と違うところは、意味を①……②……③……のように細分せず、全体をまとめて説明したことです。意味をあまり細かく分けすぎると、かえってそのことばを理解するのに不都合なことが起こりますし、また、ある意味とある意味とのつながりがわかりにくくなってしまう、といった欠点も生じます。意味の示し方には、そのほかにも多くの難しい問題がありますが、ともかく、ひとつのことばを全体として理解するには、やはり、筋の通った説明のほうがよいようです。この説明の部分は、じっくり読んで、あなた自身が文例にもとづいて意味を考える場合の参考にしてください。

言うまでもなく、ことばは、わたしたちにとって欠かすことのできない大事なものです。自分が心に思っていることを他の人に打ち明け、反対に他の人の考えを自分に受けとめる、このように人と人とが理解しあうための手段として、ことばは最も重要な役割を果たしています。また、自分の考えを確かめたり、それまでの自分の生活を省みたり、将来の自分を考えたりするときにも、ことばで表現できると、ますますよく自分自身が理解できるようになります。そして、わたしたちの前に、それまで見たこともなかった新しい世界を開いてくれるすぐれた詩や文学の数々……。それもこれもことばなくしては考えられません。わたしたちの社会も、わたしたち個人も、ことばから成り立っていると言ったら言いすぎになるでしょうか。以上のようなことも考えながら、わたしたちはこの辞典を編集しました。この新しい形式の辞典を通して、日本語による表現の豊かさと多様性にふれ、ことばについて考えることによって、あなた自身とあなたの生活、身の回りやこの社会への理解が深まることを願ってやみません。

昭和六十年十一月

筑波大学　林　史典
都留文科大学　金子　博
国立国語研究所　鷲岡昭夫
教育技術研究所　国語企画室
編集協力
桐朋学園大学　柿崎敬彦

あ

あい【愛】

・〈愛の手〉発展途上国の飢えた人々に、世界中から愛の手が差しのべられている。
・〈愛を貫く〉長い間の愛を貫いて結ばれた彼らは、今ごろ、二人だけの世界に浸っているだろう。
・〈愛のきずな〉〈愛のあかし〉この手紙の束は、二人の愛のきずなであり、愛のあかしなのだ。
・〈愛におぼれる〉子供のころのわたしは、祖父母の愛におぼれていたと言ってよい。
・〈愛が芽生える〉〈愛をはぐくむ〉二人の間に愛が芽生え、ひそかにはぐくまれていたのを、だれも知らなかった。
・〈両親の愛〉少年は、両親の愛を一身に集めたうえ、多くの人の愛に包まれて成長した。
・〈愛に満ちる〉彼は、貧乏学者だが、人間と自然への愛に満ちた人である。
・〈真実の愛〉青春とは、人間の真実の愛や友情について、真剣に悩む時期である。
・〈愛の言葉〉甘い愛の言葉をささやかれて、ついふらふらと結婚詐欺に引っかかってしまうという話を聞く。
・〈愛の交流〉〈深い愛〉この小説は、主人公の少年と捨て犬との深い愛の交流を描いたものだ。
・〈愛や憎しみ〉この老木は、喜びや悲しみ、愛や憎しみなど、おびただしい人間のドラマを見てきたに違いない。
・〈愛を注ぐ〉親は子に限りない愛を注ぐが、子にそれが分かるのは、自分が親になったときだろう。
・〈愛する〉人類を深く愛する彼は、一生を平和運動と社会事業に捧げたのであった。

あいかわらず【相変わらず】

・母親の心配をよそに、子供らは相変わらず、暗くなるまで裏通りで遊んでいる。
・祖父の病気は、一進一退をくり返していて相変わらずだ。
・遠くへ就職した友達から、相変わらず元気で働いている、と便りがあった。
・ご覧のとおり、相変わらずの貧乏暮らしで、どうにもならんよ。

あいさつ（挨拶）

・〈あいさつの言葉〉四月の始業式には、新任の先生方があいさつの言葉を述べられます。
・〈開会のあいさつ〉生徒会で開会のあいさつをするとき、緊張して声がうわずってしまった。
・〈時候のあいさつ〉〈あいさつをかわす〉時候のあいさつをかわすのは、日本独特のやり方なのだろうか。
・〈あいさつを受ける〉披露宴が始まるとき、新郎・新婦は入り口に立って、招待客からお祝いのあいさつを受ける。
・〈あいさつを返す〉近所の人に会ったので、軽く頭を下げたら、丁寧にあいさつを返してくれた。
・〈あいさつがない〉隣に引っ越してきた若夫婦からは、二か月たっても何のあいさつもない。
・〈あいさつのしようがない〉いきなりどなられたんじゃ、あいさつのしようがないよ。
・〈とんだごあいさつ〉人の顔を見て、「おもしろい顔ね。」とは、とんだごあいさつだ。

あいしゅう【哀愁】

・〈哀愁を帯びる〉ラジオから哀愁を帯びたメロディーが流れてきて、感傷的な気分にさせられた。
・〈哀愁がただよう〉肉親を一度に失った老人の後ろ姿には、孤独な哀愁がただよっている。
・〈人生の哀愁〉〈哀愁がにじむ〉この作品には、全編を通して、そこはかとない人生の哀愁がにじんでいる。
・〈哀愁をそそる〉飛行機の窓の下に見える町の明かりは、なぜか旅の哀愁をそそる。
・〈人間の哀愁〉彼には、故郷を失って独りで都会に住む人間の哀愁を感じる。
・〈哀愁の気持ち〉この短歌は、白鳥を題材に、哀愁の気持ちをこめて、格調高く歌いあげている。

あいじょう【愛情】

・〈愛情こめる〉ささ舟流しや草笛や花輪作りは、子供たちが長い年月、愛情こめて育てた野の遊びだ。
・〈愛情を注ぐ〉世の親は、わが子の成長を楽しみに、限りない愛情を注いで、懸命に育てる。
・〈愛情豊か〉ぼくたち兄弟は、両親から誠実で愛

情豊かな生き方を学んだ。
・〈自然への愛情〉現代人は、世の中の目まぐるしい動きに追われて、自然への愛情を失いかけている。
・〈愛情が深い〉彼は妻に対する愛情が深かったので、妻の死後、再婚しなかった。
・〈愛情をもつ〉仕事に愛情と誇りをもつ父を、ぼくは心から尊敬している。
・〈愛情がわく〉金魚を飼育・観察して、生活の様子が分かると、愛情がわいてきた。
・〈細やかな愛情〉母からの手紙は、いつも細やかな愛情が文面ににじみ出ているようだ。
・〈愛情が冷める〉あんなに熱烈な恋愛結婚をした仲なのに、彼らの愛情は、急速に冷めたらしい。

あいず【合図】

・〈合図を送る〉猟師の一人が「獣だ、静かにしろ。」と、仲間に片手を挙げて合図を送った。
・〈合図をする〉友達としゃべっていたら、兄がちょっと来いと、目で合図をした。
・〈集合の合図〉〈合図がある〉遠足で集合の合図があったとき、わたしは、まだお弁当を半分しか食べていなかった。
・〈合図にする〉母が帰ってきたのを合図のようにして、友達はそそくさと帰っていった。
・〈合図に用いる〉昔、授業開始の合図に用いた鐘が、学校の資料室に保存されている。
・〈合図のベル〉追悼式典の始まる合図のベルが公会堂に鳴り響いた。
・〈合図する〉ぼくが手を挙げて合図すると、彼はにこっと笑ってみせた。

あいそ【愛想】

・〈愛想がよい〉あの男は、晩年、非常に愛想がよくなったが、昔は無愛想だった。
・〈愛想を尽かす〉彼は、母親が愛想を尽かし、父親も持て余しているなまけ者だ。
・〈愛想が尽きる〉みえっぱりで、けちでグズのあんな男には、つくづく愛想が尽きたわ。
・〈愛想を振りまく〉うちの赤ちゃんは、人懐こくて、だれかれなしに愛想を振りまく。
・〈愛想が悪い〉この駅の改札口の係員は、全くぶっきらぼうで愛想が悪い。
・〈愛想を言う〉姉は正直で、愛想を言うのが下手だから、ずいぶん損をしている。
・〈愛想笑い〉ふだん傲慢な彼がひくつな愛想笑いをうかべて、借金を頼みにきた。
・〈愛想がない〉せっかくいらっしゃったのに、なんのお愛想もなくて、ごめんなさいね。
・どうもごちそうさま、お愛想してください。

あいだ【間】

・〈間をあける・つめる〉前の人との間をあけないで、きちんとつめて並びなさい。
・〈間に入る〉友達がけんかを始めたので、間に入って止めた。
・〈本の間にはさむ〉庭のもみじの葉があんまり美しいので、本の間にはさんで押し葉にした。
・〈島の間を縫う〉船は港を出ると、小島の間を縫って、波静かな海を進んでいく。
・〈間を置く〉この薬は、食後、しばらく間を置いてから飲みなさい。
・〈一瞬の間〉浦島太郎が玉手箱をあけると、一瞬の間に数十年がたったそうな。
・〈何か月もの間〉あの年は、めったにないような日照り続きで、何か月もの間、一滴の雨も降らなかった。
・〈春から夏の間〉春から夏の間、かえるは土の上を跳びはねたり、水の中を泳いで元気に過ごす。
・〈長い間〉長い間、風雪に耐えてきた村の名物ざくらも、最近、すっかり衰えが目立つ。
・〈一生の間〉いくらお金があれば、一生の間自由にそして幸福に暮らせるのだろうか。
・〈知らず知らずの間〉癖が知らず知らずの間に父の体を冒していた。
・〈留守の間〉ちょっと留守の間に、着物や指輪などをこっそり盗まれてしまった。
・〈この間〉今度受け持ちの先生は、この間学校を出たばかりの独身の美人だ。
・〈間を取りもつ〉兄夫婦の間を取りもったのは、実は犬のゴロなんだ。
・〈兄弟の間〉兄弟の間で秘密にするなんて、水臭いじゃないか。
・〈あたしたちの間〉あたしたちの間はもうこれでおしまいよ。
・〈間を隔てる〉いつのまにか目に見えない厚い壁が親友との間を隔ててしまったようだ。

・〈国と国との間〉わが国と中国との間の不幸な戦争は、長く続いて十五年戦争といわれる。
・〈群衆の間〉燃えるホテルの窓から、宿泊客が助けられたとき、見守る群衆の間にどっと歓声が起こった。
・〈目と鼻の間〉ぼくの家と目と鼻の間に学校があるので、皆にうらやましがられる。

あいちゃく【愛着】

・〈愛着を抱く〉作者はこの作品にたいそう愛着を抱き、亡くなるまで推敲を加えていたそうだ。
・〈愛着をもつ〉ふるさとに強い愛着をもつ兄は、学校を卒業すると、地元へ就職した。
・〈愛着がわく〉高価でなくても、長い間使い慣れた物には、何となく愛着がわくものだ。
・〈愛着を感じる〉父は、若いころから読み親しんできた日本の古典に、特に愛着を感じると言う。
・〈愛着が深い〉母は、古い汚いがらくたにも愛着が深いらしく、捨てようとはしない。
・〈愛着を失う〉〈物に対する愛着〉日本が経済大国に変貌した背後で、人々は、物に対する愛着を失ったようだ。

あいつ・ぐ【相次ぐ】

・父親と兄を相次いで亡くした少女は、母親を助けて家事をきりもりしていった。
・〈事件が相次ぐ〉殺人・銀行強盗など、大きな事件が相次ぎ、小さな町は大騒ぎだ。
・〈相次ぐ災難〉商売の失敗、自宅の火災と相次ぐ災難に、さすがの彼もがっくりきている。
・〈相次ぐ空襲〉東京の町々は、相次ぐ空襲で焼き払われたが、父の家の一角だけが焼け残った。
・〈客が相次ぐ〉祖父が病床に就いてからは、見舞い客が相次ぎ、母は接待に追われている。

あいて【相手】

・〈相手に伝える〉手紙は、相手に伝えたいことだけでなく、相手の気持ちを考え、心をこめて書こう。
・〈相手にする〉母に、赤いトレーナーをねだったら、「古いのがあるでしょ。」と、相手にしてくれない。
・〈相手をする〉孫たちの相手をするのが、祖父の重要な日課であった。
・〈相手の弱みにつけこむ〉相手の弱みにつけこんで、金を脅し取るなんて、ひきょうなやり方だ。
・〈相手になる〉我と思わんやつはかかって来い、相手になろう。
・〈相手が相手だけに〉上役に借金を申し込まれたが、相手が相手だけに断りにくくて困る。
・〈相手にとって不足はない〉明日の試合は、優勝候補との対戦だから、相手にとって不足はない。
・〈相手次第〉作戦をどうするかは、試合の相手次第で決めよう。
・〈遊び相手〉〈話し相手〉父と母は、幼いころは遊び相手であり、学生時代は良き話し相手であったという。
・〈子供相手〉たかが小学四年生の子供相手と思って将棋をさしていたら、みごとに負かされてしまった。

あいにく（生憎）

・〈あいにくの雨〉あいにくの雨で、遠足を楽しみにしていた妹はがっかりしている。
・〈あいにくなこと〉卒業以来初めてのクラス会だというのに、あいにくなことにかぜをひいてしまった。
・担当者があいにくおりませんので、後ほどこちらからお電話させていただきます。
・せっかくプロ野球の招待券をもらったのに、あいにく暇がなくて残念だ。
・〈おあいにくさま〉おあいにくさま、遊びになんか行ってるから、おやつは残ってないわよ。

あいま【合間】

・〈家事の合間〉母は、家事の合間に、図書館から借りた本を読むのを楽しみにしている。
・〈仕事の合間〉古い橋をかけ直す仕事は、村民たちが畑仕事の合間合間に協力して進めた。
・〈合間をみる〉母は、店の仕事の合間をみては、入院中の妹の様子を見にいく。
・〈合間を縫う〉忙しい仕事の合間を縫って、父はよく山歩きに出かけた。

あいまい（曖昧）

・〈意味があいまい〉日本語では、文章の意味があいまいになったり、誤解される恐れのない場合には、主部を表現しないことが多い。

。〈あいまいな態度〉彼女は、相手のあいまいな態度にいや気がさしてつき合いをやめた。
。〈考えのあいまいさ〉文章を書くと、自分の考えのあいまいさがよく分かるものだ。
。〈あいまいもこ〉彼の言うことは、いつもあいまいもことしていてまるで雲をつかむようだ。

あいよう【愛用】

。〈愛用の自転車〉愛用の自転車がパンクしたので、弟のを借りてお使いに行った。
。〈愛用する〉祖父が生前愛用したすずりを形見にもらったので、大切にするつもりだ。
。〈辞書を愛用する〉父は、中学の入学祝いにもらった辞書を、いまだに愛用している。

あ・う【合う・会う・遭う】(逢う)

。〈環境に合う〉海から陸に上がった動物は、長い間かかって、環境に合うように体を変えてきた。
。〈場に合う〉きみはもう少し、その場に合った話し方をするように気をつけなさい。
。〈事実と合う〉この文章は、美しい言葉を並べて書かれているが、事実と合っていない。
。〈水準に合う〉毛皮のコートなどという、わが家の生活水準に合わないものを欲しがるでない。
。〈気が合う〉いつでも気が合って、いっしょにいられる友達が欲しい。
。〈呼吸が合う〉運動会の二人三脚では、わたしとかずちゃんは、ぴったり呼吸が合った。
。〈調子が合う〉兄は早足なので、いっしょに歩くと調子が合わない。
。〈心に合う〉自分の心に合う生き方を見つけることは、非常に難しい。
。〈答えが合う〉隣の席の子と答えを合わせたら、全部合っていた。
。〈話が合う〉祖母は、隣のおばあさんと同年輩で話が合う。
。〈口に合う〉こんないなかですから、お口に合うようなものはございませんが……。
。〈眼鏡が目に合う〉この眼鏡は度が強過ぎて、わたしの目に合わない。
。〈時計が合う〉きみの時計、本当に合っているのかい？
。〈割に合わない〉その仕事は割に合わないから、引き受けられないよ。
。〈人に会う〉〈意見が合う〉人に「あう」ときは会う、意見が「あう」ときは合うと書きます。
。〈会うは別れの始め〉「会うは別れの始め」という通り、愛する者ともいつか必ず別れねばならない。
。〈あらしに遭う〉航海の途中、船はあらしに遭い、非常に苦しい経験をした。
。〈つらい目に遭う〉どんなにつらい目に遭っても、それを乗り越えていける自信がある。
。〈災難に遭う〉不通になって列車内で夜明かしなんて、とんだ災難に遭ったものだね。
。〈不意打ちに遭う〉さすがの剣の名人も、暗やみで不意打ちに遭ってあえない最期をとげたという。
。〈事故に遭う〉車の事故に遭って、予定より三時間も遅れてしまった。

[説明] (二つあるいはそれ以上の事物が、くいちがったり釣り合わなかったり離れたりせず、互いに一致し、調和し、集合し、一つになる)ことをいうのが基本で、広く(調和する、釣り合う、一致する、あてはまる、一つになる、同じになる、対面する、出会う、出くわす)などといった意味を表す。そのほか、「慰め合う」「よろこび合う」のように「〜合う」のかたちで、(互いに〜する)という意味になることも多い。

(調和する、釣り合う、一致する、あてはまる、一つになる、同じになる)などという意味では「合う」、(対面する、出会う)などという意味では「会う」と書くが、「事故に遭う」「災難に遭う」「つらい目に遭う」のような場合は「遭う」という漢字を当てるのが普通。

あえ・ぐ(喘ぐ)

。〈あえぎあえぎ走る〉早朝マラソンでは、ぼくは、いつもびりからあえぎあえぎ走っている。
。〈苦しげにあえぐ〉倒れた馬は苦しげにあえいだ後動かなくなった。
。〈重荷にあえぐ〉重荷にあえぎながら、山の頂上にたどり着いたときの満足感が、登山のだいご味だ。
。〈生活苦にあえぐ〉戦中・戦後の生活苦にあえいだころを思うと、今は極楽だよ。
。〈不景気にあえぐ〉不景気にあえぐ各国では、失業者の数がどんどん増えている。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

あお・い【青い】

・〈青い空〉夕立がやむとまもなく、向こうの青い空高く、七色のにじが現れた。
・〈青い海〉ホテルの窓から、眼下に青い海が広がっているのが見える。
・〈青い顔〉病気で休んでいた山本君が、久しぶりに、やせて青い顔で登校した。
・〈青くなる〉映画を見て帰ったら、財布がないのに気づいて青くなった。
・〈実が青い〉庭のかきは、去年は、実が青いうちにみんな落ちてしまった。
・〈しりが青い〉おまえはまだお尻が青いくせに、生意気を言うんじゃない！

あお・ぐ【仰ぐ】

・〈星空を仰ぐ〉叙情的なこの作品を読んだ後は、今までと違った思いで星空を仰ぐようになった。
・〈天を仰ぐ〉子を失った親は、天を仰いで嘆き、地に伏して悲しむといっても、大げさではない。
・〈師と仰ぐ〉明治維新に活躍した志士の中には、吉田松陰を師と仰いだ者も多かった。
・〈指図を仰ぐ〉分からないときは、先生や親の指図を仰ぐようにしよう。
・〈教えを仰ぐ〉幕末の長崎で、シーボルトに教えを仰いだ弟子の中からは、多くの人材が出た。
・〈援助を仰ぐ〉父は、昔、学資の援助を仰いだ恩人に、今も深く感謝している。
・〈毒を仰ぐ〉古代ギリシアの偉大な哲学者ソクラテスは、毒を仰いで死んだという。

あお・ぐ（扇ぐ・煽ぐ）

・〈うちわであおぐ〉お母さんは、添い寝しながら、赤ちゃんをうちわで静かにあおいでいます。
・〈炭火をあおぐ〉ガスのないころは、七輪の炭火をばたばたあおいでおこしたものだよ。
・〈下敷きであおぐ〉山本君は、教室に飛びこむなり、暑い暑いを連発して、下敷きであおいでいる。

あお・る（煽る）

・〈風にあおられる〉帽子が風にあおられて、あっと言う間に飛ばされた。
・〈火をあおる〉海からの強風が火をあおり、火が風を呼んで燃え広がり、またたくまに町を焼き尽くした。
・〈人からあおられる〉おっちょこちょいの彼は、周りからあおられると、すぐその気になる。
・〈競争心をあおる〉あの教育ママは、「友達は皆ライバルよ。」と、子供の競争心をあおっている。
・〈人気をあおる〉タレントを売りだすために、マネージャーや所属プロでは、人気をあおるのに懸命だ。

あか・い【赤い】

・〈赤い血〉腕の傷口からは赤い血が吹き出ていた。
・〈赤い夕焼け〉家の後ろには、赤い赤い夕焼け空がいっぱいに広がっている。
・〈赤い実〉ナンテンが赤い小さな実をつけている。
・〈赤く燃える〉五月になると、この山々はみな新緑に包まれ、ところどころに、つつじが赤く燃えて見えます。
・〈顔が赤くなる〉電車を待っているとき、セーターを裏返しに着ているのに気づき、思わず顔が赤くなった。
・〈目が赤い〉迷子になって泣いたのか、その子の目は赤かった。
・〈赤い炎〉キャンパスに女子大生が大勢集まって、何やら赤い気炎をあげている。

あかし（証）

・〈身のあかしを立てる〉兄は、疑われている友人の、身のあかしを立ててやるのだといって、一生懸命だ。
・全員の賛成が得られたという事実が、わたしが正しかったことの何よりのあかしであった。
・丘を削ったところに庭木がよく育たないのは、地味が劣っているというあかしである。
・〈生きたあかし〉遺跡には、わたしたちの祖先が生きたあかしがあり、生活の知恵や感情が息づいていた。

あか・す【明かす】（証す）

・〈夜を明かす〉終電車に乗り遅れて、駅の待合室で夜を明かさなければならなかった。

・〈身の上を明かす〉行きだおれのふろう者は、身の上を明かすこともなく、病院で息を引き取った。
・〈本心を明かす〉その若者は、無口で本心を明かすこともないので、なかなか友達ができなかった。
・〈身の潔白を明かす〉目撃者がいないので、彼の身の潔白を明かすのは容易なことではないだろう。
・〈種を明かす〉難しそうな手品でも、種を明かすと案外簡単なものが多いようだ。
・〈真相を明かす〉「きみにだけは」と、彼はこの事件の真相を明かしてくれた。
・〈鼻をあかす〉なんとかして、いつも自信たっぷりなあいつの鼻をあかしてやりたい。
・〈飲み明かす〉やっと就職が決まった大学生の兄は、今夜は飲み明かそうと、友達をさそっている。

あかつき【暁】

・〈暁を迎える〉昨夜来、書き物に夢中で、ふと気づいて辺りを見回すと、すでに暁を迎えていた。
・〈暁を待つ〉わたしたちはまだ暗いうちに起きて、暁を待たずに出発した。
・まだほの暗い暁を指す言葉に「かわたれ(彼はたれ)どき」というのがある。
・〈成功した暁〉この事業が成功した暁には、あなたを重役として迎え入れるつもりだ。
・〈勝利の暁〉明日は決勝戦で、勝利の暁には、海外遠征が待っている。

あかり【明かり】

・〈月の明かり〉樹氷が月の明かりに照らされて、一面に白い花が咲いたようだ。
・〈家々の明かり〉飛行機が高度を落とすと、無数の家々の明かりが見えてきた。
・〈明かりがつく・消える〉古くなった蛍光灯の明かりが、ついたり、消えたりしている。
・〈明かりにする〉電灯もランプもない開拓地では、夜は小割りにした松の根をたいて明かりにした。
・〈明かりをともす〉友達のはげましが沈んだわたしの心に明かりをともしてくれた。
・〈明かりがさす〉通りすがりの家の窓に明かりがさし、子供たちの笑い声が聞こえてくる。
・〈明かりをとる〉わたしの勉強部屋は、大きな窓が二つあるので、明かりが十分にとれます。
・〈雪明かり〉窓の外がほんのり明るくなって、夜明けかと思ったら、雪明かりだった。

あが・る【上がる・挙がる・揚がる】(騰がる)

・〈高い所へ上がる〉少し高い所へ上がって見ると、大きな建物だって小さく見えるのである。
・〈階段を上がる〉突き当たりの階段を上がると、ぼくの勉強部屋がある。
・〈花火が上がる〉運動会の日の朝、学校の校庭にぽんぽんと勢いよく花火が上がりました。
・〈歓声が上がる〉「次の時間は自習です。」という先生の言葉で、教室中に生徒の歓声が上がった。
・〈学校へ上がる〉早いものでうちの娘も、学校へ上がる年になりました。
・〈雨が上がる〉〈気温が上がる〉雨が上がると、それまで低かった気温もぐんぐん上がってきました。
・〈風呂から上がる〉風呂から上がって飲むビールの味は格別だと、父が言っていた。
・〈練習から上がる〉練習から上がった部員たちがどっと食堂へ入ってきた。
・〈成績が上がる〉ちっとも勉強していないのだから、成績が上がらないのは当然です。
・〈効果が上がる〉気まぐれな性格で、気が向いたときしかやらないから、さっぱり効果が上がらない。
・〈能率が上がる〉学習は、自分から積極的に行うことによって興味も増し、能率も上がります。
・〈水準が上がる〉一生懸命働けば収入がふえ、生活の水準も上がると思われた。
・〈物価が上がる〉またまた物価が上がり、生活は苦しくなる一方です。
・〈頭が上がらない〉総理大臣でも、小学校のときの先生に会うと、頭が上がらないそうです。
・〈火の手が上がる〉町の中心部から火の手が上がり、おりからの風にあおられて、たちまち町全体に広がった。
・〈腕が上がる〉練習を積んだかいがあって、わたしの車の運転も、ずいぶんと腕が上がりました。
・〈ふうさいが上がらない〉彼女はあんなふうさいの上がらない男と、どうして結婚する気になったのだろう。
・〈意気が揚がる〉後半三十分、味方が押し気味と

あって、応援団の意気は揚がる一方だ。
。〈名が挙がる〉次期大統領候補として、スミス氏、ジョーンズ氏の名が挙がっている。
。〈バッテリーが上がる〉雪の朝、バッテリーが上がってしまったらしく、車はウンともスンとも動かない。
。〈費用が～円であがる〉忘年会は一人あたり五千円であがったので、余ったお金は次回のために積み立てておきます。
。〈試験であがる〉準備がよくできていれば自信がもてるので、試験であがるということもありません。
。〈お宅に上がる〉いいえ、先生のお宅には、一度上がったことがあります。
。〈犯人が挙がる〉通り魔事件の犯人が挙がって、みんなほっと胸をなでおろしたところです。
。〈手が挙がる〉海と山のどちらがよいかと聞いたところ、断然、海にたくさんの手が挙がりました。
。〈魚が揚がる〉魚の中でも、ことにタイが揚がってくると、港の周辺はにぎわった。
。〈天ぷらが揚がる〉ちょうど天ぷらが揚がったところですから、熱いうちにどうぞ。

説明 「高い所へ上がる」「階段を上がる」などといった用法だけでなく、ものごとを上下の関係としてとらえた場合の言い方として広く用いられる。例えば「成績が上がる」「能率が上がる」などは、ものごとの程度を上下の関係としてとらえた表現。また、「歓声が上がる」「名声が揚がる」「意気が揚がる」などは、声や評判、心の状態などについていった例。

そのほか、「明日いただきにあがります」「たくさんおあがりください」のように、相手を敬っていう場合の用法もある。

「犯人が挙がる」「天ぷらが揚がる」のような場合には「挙がる」「揚がる」と書くが、「上」と「挙・揚」との漢字の使い分けには、はっきりしない場合もある。

「あがる」と「のぼる」は、意味が似ているが、使い方はかならずしも同じではないので注意が必要。

あかる・い【明るい】

。〈空が明るい〉もう夜明けが近いのだろう、東の空が明るくなってきた。
。〈電灯が明るい〉新しい電球に取り替えたぼくの部屋の電灯が、明るくてまぶしい。
。〈明るい日差し〉明るい日差しをいっぱい受けて、妹たちは縁側でままごと遊びに忙しい。
。〈明るい色〉ぼくは、明るい色を使って絵をかくのが好きだ。
。〈明るい子〉あの子は、とても明るく素直なので、だれにでも好かれる。
。〈明るい町〉わたしたちの住む町を、争いや犯罪のない明るい町にしたいと思う。
。〈雰囲気が明るい〉新学期が始まって、皆が張りきっているせいか、クラスの雰囲気が明るく感じられる。
。〈未来が明るい〉努力を忘れなければ、きみたちの未来は明るい。
。〈見通しが明るい〉全社員が力を合わせたおかげで、うちの会社の見通しも明るくなってきた。
。〈法律に明るい〉法律に明るい人がそばにいると、何かにつけ便利だ。
。〈地理に明るい〉山で道に迷うと困るから、この辺りの地理に明るい人を、案内に頼もう。
。〈歴史に明るい〉近所のおじいさんは、この町の歴史に明るいそうだから、一度話を聞いてみたい。

説明 「赤い」「明ける」などと意味的な関係の深いことばで、(光の量が多く、物がはっきり見える)状態をいうのが基本。

明るいと物がよく見えるところから、「法律に明るい」「地理に明るい」「歴史に明るい」のように、「ものごとをよく知っている、ものごとによく通じている」という意味にも用いられる。

「明るい色」は、明るく感じる色ということで、色を明るさにたとえた言い方。また、「明るい子」「明るい雰囲気」「将来が明るい」なども、性格、雰囲気・未来などを明るさで表現した言い方。一般に「明るい」ということばは、よい感じ、好ましい感じをともなう。

あきな・う【商う】

。〈日用品を商う〉祖母は、道の端に小屋を作ってもらい、日用品を商う生活を始めた。
。〈魚を商う〉わたしの父は魚を商うのが仕事なので、ねぼうはできません。

あきらか【明らか】

・〈だれの目にも明らか〉浅間山は、今も絶えず噴煙を上げているから、活火山であることは、だれの目にも明らかだ。

・〈根拠を明らかにする〉自分の考えを述べるときは、根拠を明らかにし、的確な言葉を用いることが大切だ。

・〈実態が明らかになる〉問題点がはっきりし、実態が明らかになるにつれて、みんなの考えもだんだんはっきりしてきた。

・〈火を見るより明らか〉前もって準備をしなかったのだから、結果がよくないのは火を見るより明らかだ。

・〈明らかに悪い〉きみのノートをふざけて破いたのは、明らかにぼくが悪いけど、何もなぐらなくてもいいだろう。

・〈明らかな証拠〉泥棒は、警察で明らかな証拠をつきつけられても、なかなか自白しなかったそうだ。

あきら・める（諦める）

・落としたのが財布では、まず出てこないものと、あきらめるより仕方がない。

・もう二度とあなたのお琴は聴けないものとあきらめておりました。

・何回もしつこくおもちゃをねだる弟に、父は、いいかげんにあきらめろ、とどなった。

・〈進学をあきらめる〉少年は、家の貧しさから進学をあきらめて呉服屋に奉公しなければならなかった。

・〈きっぱりあきらめる〉彼女がいやだと言っているのだから、きみも男らしくきっぱりあきらめたほうがいい。

・〈半ばあきらめる〉半ばあきらめたような気持ちで受験した高校に合格して、家中大喜びした。

・〈結婚をあきらめる〉五人の求婚者は、それでも姫との結婚をあきらめきれず、知恵や富の力で難題にいどんだ。

・〈潔くあきらめる〉そんな高価な品はわたしにとっては身分不相応と、潔くあきらめればよいのだが、やはり未練は残る。

あ・きる【飽きる】

・〈遊びに飽きる〉庭で妹たちがままごとをしていたが、そのうちに飽きたのか、どこかへ行ってしまった。

・〈～するのに飽きる〉かもは卵をだくのに飽きると、池のふちを歩き回り始めた。

・〈勉強に飽きる〉勉強に飽きれば茶の間にくるだろうと待っていたが、三時間たっても弟はおりてこなかった。

・〈～しても飽きない〉教科書とちがい、この漫画の本は、いくら見てもおもしろくて飽きない。

・〈飽きることを知らない〉子供たちは、一日中遊び回って飽きることを知らない。

・〈飽きるほど～する〉残飯をあさっていた野良ねこは、飽きるほど食べると眠くなったのか、長々とねそべっている。

あき・れる（呆れる）

・〈あきれた顔〉今日も学校で立たされたと聞くと、母は、またかとあきれた顔をした。

・〈あきれるほど〉方言は、すぐ変わる流行語とちがって、あきれるほど気長に、地方に根づいて使われている。

・〈あきれてものが言えない〉忘れ物の多い兄は、きょうも上着と教科書を忘れてきたので、あきれてものが言えなかった。

・〈あきれた人〉左右別々の靴下をはいていて、一日中気がつかなかったなんて、あきれた人だね。

あ・く【空く・明く・開く】

・〈目が開く〉ひよこは、殻を破って出てきたときには、もう目が開い（明い）ている。

・〈ドアが開く〉ひとりでにドアが開いたり閉まったりするタクシーは、日本にしかないそうだ。

・〈店が開く〉近所のパン屋は、朝七時前にもう店が開いている。

・〈幕が開く〉幕が開くと、けんらん豪華な舞台に、すっかり目を奪われた。

・〈穴が空く〉帰省した兄の荷物から出てきたのは、汚れた下着、穴の空いた靴下、ほころびた上着……。

・〈一行空く〉国語のテストで、文中の一行空いている箇所を、適当な言葉で埋める問題ができなかった。

。〈席が空く〉映画を見に行ったが満員だったので、席が空くまで待つことにした。
。〈部屋が空く〉便利で日当たりが良く、家賃が安いアパートなんて、めったに部屋が空かないよ。
。〈手が空く〉お母さん、手が空いたときでいいから、手袋の編み方を教えてよ。
。今度の土曜日、空いていたら、引っ越しの手伝いに来てくれないか。
。〈電話が空く〉電話がなかなか空かなくて、いらいらしながらとうとう三十分も待たされた。
。〈時間が空く〉旅行のおみやげを渡したいから、時間が空いているときに寄ってちょうだい。
。〈開いた口がふさがらない〉ふだんからいたずらな弟だが、池のこいを手づかみで放り投げたのには、開いた口がふさがらなかった。

アクセント

。「春」「張る」などの同音語を、同じアクセントで発音すると、意味の区別がつきません。
。〈アクセントがある・ない〉アクセントの違いで言葉の意味が異なるから、どこにアクセントがあるか気をつけよう。
。〈アクセントを置く〉今度はウエスト・ラインにアクセントを置いた、女の子らしいドレスがほしいわ。
。〈アクセントをつける〉このセーターは、色が地味なので、胸に花模様のアクセントをつけてみた。

あくま【悪魔】

。〈心に悪魔がすむ〉天使のような子供の心にも、悪魔はすんでいるのである。
。〈悪魔がささやく〉だれも見ていない、盗んでしまえと、悪魔がささやいた。
。この寒空に、子供のふとんまで借金のかたに持っていくとは、あいつは悪魔だ。
。〈悪魔にたましいを売る〉この小説の主人公は、ふとしたできごころから悪魔にたましいを売る男としてえがかれている。

あくまで【飽くまで】

。きみが、あくまでうそをつきとおすなら、もう遊んでなんかやらないよ。
。お客様に対しては、あくまで礼儀正しく応対するように。
。空はあくまで青くすみ、赤とんぼが群れをなして飛ぶのどかな秋も、もうまもなく終わりだ。
。味方の軍は、あくまで敵の攻撃に抵抗し、橋を守りとおした。
。民主主義の国では、国民の希望や要求は、あくまで議会を通して実現させるべきである。
。写真に写っている現像は、あくまで現実そのものとは違う。

あくむ【悪夢】

。〈悪夢にうなされる〉ぼくは、ときどき悪夢にうなされて目が覚めることがある。
。〈悪夢のような一夜〉火に追われ、川に飛び込んでやっと助かった人々にとっては、悪夢のような一夜であった。
。〈悪夢からさめる〉娘が非行から立ち直ったとき、両親は、「長い悪夢からさめたようだ。」と喜んだ。
。〈悪夢から解き放たれる〉悪夢から解き放たれ、彼は、青空のようなそう快感にひたっていた。

あくる【明くる】

。〈明くる朝〉一日歩き続けると、体じゅうが痛くて、明くる朝なかなか起き上がれない。
。〈明くる日〉節分は、今のこよみでは二月三日か四日で、その明くる日が立春である。
。〈明くる年〉その年、村人の念願だった橋の工事が始まり、「完成したのは、明くる年の冬だった。

あげく【挙句・揚句】

。〈さんざん～したあげく〉山で道に迷うと、さんざん歩き回ったあげく、寒さと疲れのために命を落とすことがある。
。〈考えたあげく〉銀行と証券会社の両方の入社試験に合格した兄は、いく日も考えたあげく、銀行を選んだ。
。〈骨を折ったあげく〉二日間歩き回ってくたくたになるほど骨を折ったあげく、やっと見つけた獲物は三匹だけだった。
。〈言い争ったあげく〉十日ほど言い争ったあげく、なんとか話がついたようなので、親類の者たちもほっとした。
。〈そのあげく〉勉強をしないで遊んでばかりい

て、そのあげくどうなるかは、通知表を見なくても分かる。

◦〈あげくの果て〉男は、大酒飲みで怠け者、そのうえ競輪・競馬で大借金、あげくの果てに夜逃げをしたとか。

◦連歌・俳諧では、第一句目を発句、最後の句を挙句という。

あ・ける【明ける・開ける・空ける】

◦〈夜が明ける〉夜が明ければ、車窓に、月見草の花が咲いているのが見えるはずだ。

◦〈年が明ける〉年が明けたら、うちのあんちゃんは、仕事をさがしに町に行くという。

◦〈寒が明ける〉この地は、冬、寒が明けるまでは零下十何度という寒さが続く。

◦〈梅雨が明ける〉じめじめとうっとうしい日が続く毎日、早く梅雨が明けろとさけびたくなります。

◦〈年季が明ける〉奉公に出ている姉も、年季が明ければ、家にもどってきます。

◦〈明けても暮れても〉いくら受験生とは言っても、明けても暮れても模擬テストばっかりではいやになってしまう。

◦〈～に明け～に暮れる〉姉が子供連れで遊びに来たので、父は今日一日、孫に明け孫に暮れた。

◦〈窓を開ける〉南側の窓を開ければ、やわらかい光と気持ちのよい風が部屋中に入ってきます。

◦〈ふたを開ける〉ドラマの前評判はいいのだが、ふたを開けてみないと客の入りがいいかどうかはわからない。

◦〈店を開ける〉もう閉店時間はとっくに過ぎたというのに、外でよっぱらいが、店を開けろとどなっている。

◦〈幕を開ける〉わたしたちの祖先が文明への歩みを始めるとともに、文学の歴史もその幕を開ける。

◦〈初日を開ける〉今度の舞台は初めての主演なので、初日を開けるまでは心配でたまらない。

◦〈穴を空ける〉五十センチメートル四方の板を用意し、四隅に直径一センチの穴を空けなさい。

◦〈中身を空ける〉持ち物の検査をしますから、かばんの中身を全部机の上に空けてみなさい。

◦〈水を空ける〉銅製の容器は、使った水をすぐ空ければいいのだが、そうでないと緑青が出やすくなる。

◦〈行を空ける〉ノートは、あとで書きたしたり、直したりするのに便利だから、一行ずつ空けています。

◦〈道を空ける〉もうすぐおみこしがここを通りますので、ご通行のみなさんは、道を空けてください。

◦〈席を空ける〉近く転校生が来ますので、どこか適当な席を空けることにしましょう。

◦〈予定を空ける〉今度の土曜日は、予定を空けてあるのに、だれも誘ってくれない。

◦〈家を空ける〉自治会の役員になった母は、よく会合が開かれるので、家を空ける日が急に多くなった。

説明　「夜が明ける」「年が明ける」のように、「～があける」となる場合は、(ある時間や期間が過ぎる、時間・期間が改まる)ことを意味し、「明ける」と書くのが普通。これに対して、「窓を開ける」「ふたを開ける」、あるいは「穴を空(開)ける」「家を空ける」などのように、「～をあける」となる場合は、(そこにあるものをどかして、通路やすきまをつくる)また(そこにあるものをどかして、何もない状態にする)といった意味を表し、「開ける」「空ける」のように書く。閉じていたものを開く意味には「開ける」のほうを、何もない状態にする、空にするという意味には「空ける」のほうを使うのが原則。

あ・げる【上げる・挙げる・揚げる】

◦〈棚に上げる〉こんな所に置いてあるとじゃまだから、棚に上げておきなさい。

◦〈棚に上げる〉自分の努力不足を棚に上げて、親の責任だなどと、ぶつぶつ言う人間にはなるな。

◦〈顔を上げる〉クラスでいちばん忘れ物が多いと先生に注意され、はずかしくて、顔を上げられなかった。

◦〈頭を上げる〉人々は頭を上げて飛行機の通るのを見ている。

◦〈腰を上げる〉みんなはびっくりして砂の上から腰を上げて、じわじわと後ずさりした。

◦〈ふとんを上げる〉わたしは、ときどき寝坊をして遅刻しそうになり、ふとんを上げないで学校へ行くことがある。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com